春 岡 村 の 伝 説

シンダンベ（春岡の方言）

「シンダンベって知っているかい？」と丸ヶ崎新田の農家のおじさんが聞いてきました。
春岡の郷土史『思い出の春岡』の方言のページを開いてみると…
　「水田に棲み白色で僅か２～３分位の極小さい虫だが人畜に触れると刺す。」
　おじさんの話しによると、シンダンベは水田にぷかぷか浮いていて胴体の長さ 1.5 ㎝くらい、色は白っぽく、長いしっぽが伸びている虫だということです。春岡周辺ではだいたい昭和３０年代半ばころまで普通にいたらしいのですが、今ではすっかり目にすることはなくなりました。
「素足で田んぼに入ってこいつに刺されるととっても痛いんだよ～。ヒルやこいつに刺されないよう巾木（ゲートルみたいな布）を足に巻いて田んぼに入ったもんだ」と言っていました。
死ぬほど痛いというわけで「シンダンベ」と呼ばれたのでしょうか。
　さて、この虫の正体は「オナガウジ」と呼ばれるハナアブの幼虫です。
胴体から伸びたしっぽは呼吸管で、これをシュノーケルのように水面に出して呼吸しながらゆらゆらと泳いでいます。生活排水や家畜の排泄物の流れ込む水溜まりや排水溝といったところが住み家です。春岡周辺では昭和３０年代半ばまで肥溜めが村のあちこちにありました。また、今なら一家に一台トラクターのように、昭和初期から昭和３６～37年頃までこの辺の農家は一家に一頭農耕牛を飼っていたそうです。また、豚も飼っていたそうです。そんなわけでアブが普通にいたのでしょう。それにしても、昭和３６年頃まで「モー」とか「ブヒブヒ」といった啼き声があちらこちらから聞こえていたのですね。昭和２３年生まれの丸ヶ崎新田の人は、地元の言葉でダイヤクセ（大悪水＝田んぼの排水路）、今の深作川のところで中学生くらいまで牛の餌の草を刈るのが子どもの仕事だったそうです。

農耕牛のほとんどは赤毛の朝鮮牛でした。それ以前は牛ではなく馬を飼っていました。馬の場合は牛のように一家に一頭というわけにはいかなかったようで、明治８年の調査で深作村牡馬４６頭、丸ヶ崎村は牡馬９頭という記録があります。ちなみに戸数は深作村１７６戸、丸ヶ崎村１０９戸でほとんどが専業農家でした。
写真は丸ヶ崎新田の道端に立つ大正５年銘の「馬頭観世音」、馬のお墓です。
※自治会だよりで以前紹介した「寅子伝説」ですが、８月２９日（日）春野図書館の歴史講座で「丸ヶ崎に伝わる寅子伝説」の講演があります。講師は見沼歴史倶楽部の斎藤文孝氏です。（参加申込は８月５日から電話または直接図書館へ）　（平山由喜）